

園芸ボランティア指導事始め

——試行錯誤の経験と、そのなかで考えたこと

八原 ダリ(恵泉短大園芸生活学科22回生)

散歩や買い物の道すがら、園芸店の店頭から各家の庭や公共の場所など、街に草花が溢れるようになってきたことに気づきます。私も含め社会が全体的に、昔よりゆとりがでてきたことの証でしょう。花のある空間は美しく、緑は気持ちに安らぎをあたえてくれます。

ですが、疑問に思うこともあります。たとえば、一年草で彩られる花壇は華やかですが、植え替えの度にゴミ同然に捨てられていく大量の植物を見て、複雑な思いになっている方も多いのではないのでしょうか？

私は平成16年度より、隣接する三鷹市で園芸の講座を担当させていただくことになりました。これはいい機会だと考え、以前から感じていたことをお話し、次のようなことをお願いすることにしました。

①抜いた一年草は、ほかの場所に植えたり、欲しい方に配ったりして、花のリサイクルをして最後まで育ててあげること。

②宿根草をベースにすれば、頻繁に植え替えしない花壇作りができること。

③綺麗な花は必ずタネになる。芽が出て花が咲く過程、つまり命の誕生から成長のプロセスを見守りつづけることの大切さを実感するためにも、種蒔きから植物を育てて欲しいこと。

こういったことを、機会があるたびにお話ししながら1年が過ぎました。命の誕生が人の気持ちを揺り動かしたのでしょうか。担当者の方たちが種蒔きに興味を持ち、重い腰を上げて下さいました。種蒔きぐらいなら難しいことはないだろうと、関係者の方たちが市の苗圃で試験的にはじめてくれました。ところが、なぜか上手くいかなかったのです。

そこで私のところに、協力してほしいという相談がありました。種蒔きは恵泉で習った作業ですし、花の生産農家でも実習をしていましたので、お役に立てるならと引き受けることにしました。これが私のボランティアの始まりでした。

試行錯誤の連続

最初に苗圃の方たちと蒔いた種は「コスモス」でした。青空の下に一面に咲く秋桜を夢見ながら、用土を作り、種を蒔きました。皆さんは失敗を経験していたのですから半信半疑でしたが、上手い具合に一週間で発芽し、順調に成長していきました。ポット上げも無事にでき、大きくなった苗に市の方々は大喜びでした。

この苗を使い、市内の充分に整備されていない公園に植え付け、荒れた花壇が蘇るかどうかを試験的に行うことになり、計画を立てることになりました。現地を「見て欲しい」とのこと出向いた公園はマンションと病院のあいだにあり、木々も剪定が行き届かず、日陰のツツジは見る影もありませんでした。

立地条件の悪さを少しでも軽減するため、まずは基本の土壌を改善しましょうと提案しました。市の担当者や市民ボランティアの人たちとともに、半日かかりで地面を耕し、石を取り除きました。作業は重労働だったようで、石ころなどがやや残った状態でしたが、土を均して全員でコスモスを植え付けました。



●コスモス植え付け終了



●コスモス開花

それから6週間ほどたち、コスモスが一面に咲きはじめたときには、関係者の不安が喜びと満足に変わりました。

ところが、その後、雨が続いたため、うどん粉病がパラパラと出はじめました。生憎、市の方針で薬剤は一切使えません。枝透かしを施し、木酢液をかけることをお願いしましたが、被害は広がるばかりでした。市の方たちは、2週間ほどで諦めてしまいました。その後は一人で祈るような気持ちで対処しましたが、株も太くならず弱っていき、花数も少なくなっていました。担当者の方たちは、しだいに花壇をのぞくこともなくなっていきました。

台風が近づいて雨が降るなか、誰も来ない花壇でコスモスの手入れをしながら、花壇は花が咲いてこそ人が集まることを、あらためて実感しました。

気持ちが落ち込んだことは事実ですが、関係者のなかで自分が園芸にいちばん詳しいのだから、もう一度花壇の楽しみを知って貰うために努力するのも自分のボランティアとしての責任だと思いました。

そこでまずはじめたのが、黄花コスモスの種蒔きでした。うまく発芽し、ポット上げを経て、3週間後には植え付けられるようになりました。関係者に声をかけましたが、皆さんお忙しく、時間を取るのは無理なご様子でした。やむなく、一人で植え付けました。どうにか花壇を花で一杯にすることができれば、皆さんが花壇作りを諦めたりしないでくれると考えたからです。とても暑い日だったので、道行く方が熱中症を心配して下さったのを覚えています。

1週間後、小さな花が咲きはじめました。そしてしばらくすると、黄色やオレンジの花で美しく花壇がよみがえったのでした。

道行く方たちも目をとめて下さり、市役所の方たちも見に来てくれるようになりました。いったん消えかけた、種蒔きからはじめる花壇作りの灯が、黄花コスモスの力を借りてもう一度灯されたことに、感謝の気持ちで一杯でした。

失敗から成功へ

このような試行錯誤の過程を経て、公共施設の花壇作りが計画されることになりました。計画の内容は、まず市民による実行委員会を作り、ともに話

し合いを重ねながら公共施設の花壇をリメイクするといったものです。参加する市民への報酬はなく、作業はボランティアです。

話し合った内容は、次のようなことでした。

①実行委員会や市の関係者と顔を合わせて話し合いながら、予算や現状を確認し、また市民や関係者からの希望を把握する(さまざまな情報が入ることもありますが、それだけに左右されないよう、たがいに確認しあいます)。

②委員会の意見を反映させながら、花壇の設計と完成イメージを何パターンか用意し、たがいに検討しあう。その結果にもとづいて、基本になる花壇のイメージを作る。植栽に使う植物の傾向を確認しあう。(この段階で無理に決定に持って行かない。市民の意見に丁寧に耳を傾ける姿勢を取りながら、専門的な判断を的確に伝えることが大切です)。

③基本イメージにもとづいて設計図を作り、委員会で検討し決定してもらう。また植物のリストを見ながら、最終的な植栽植物を検討し決定してもらう。(主体はあくまで市民だということを常に念頭に置き、時間がかかっても意見を吸収していくことで、市民の方たちに自分たちの花壇だという意識を高めていただく)。

④設計と植栽の最終確認。作業内容や人員の確保を確認しあい、日程を調整する。(業者に施工を任せる部分を除いては、委員会の人たちとの共同作業になるので、少しでも作業内容の理解を深めていただき、余分な精神的負担がかからないよう配慮する)。

このような話し合いを何度も重ね、そしてようやく実行の段階となりました。工程のそれぞれに、あれこれ話し合い工夫しあいましたが、それでも試行錯誤と苦労はありました。工程の段階ごとに、私たちの工夫と体験を書いておきます。

第1段階：まず剪定です。環境を改善するために樹木の剪定が必要かどうかは、場所によって異なります。業者に依頼しなければならないことも少なくありませんが、市の予算が出ない場合には、経験者が指導しながら委員会の方たちと剪定します。

はじめの2箇所は業者に依頼しましたが、3箇所目は皆さんの意気込みを高めるためにも全員で剪定したいとの意向が委員会から寄せられ、また予算

の関係もありましたので、全員で実行しました。

最も高い木は樹高が10メートル以上もあり、枝を見上げながらやり遂げようと決心しました。危険がともなう場合には、作業が終了するまで無事故が最優先の課題です。なにか起きてしまうと、全体の流れに大きく影響します。たがいにボランティアであるがゆえに、たがいに迷惑がかかり、結局は、主催者である市にも大きな迷惑をかけてしまうからです。

剪定する木の一本ずつに、心のなかで、「痛い目に合わせますが、悪いことをするのではなく、よく育つよう手助けをさせて貰うつもりなので、どうか宜しくお願いします」と声をかけました。

私と男性1名で剪定作業を進め、大量の剪定枝を市民の方たちが次々に片づけてくださり、作業は無事に終わりました。かなり大変な仕事でしたが、皆さんから「センターの植栽がこんなに整えられたのを見たのははじめてです」との嬉しい感想の声が聞くことができ、花壇作りへの期待が膨らんだことを実感しました。

第2段階：次に花壇枠を造りましたが、これは業者に依頼しました。

第3段階：さて、花壇作りの大切な基礎の土作りです。植物の生育を左右する環境条件には、日当たりの善し悪し、雨水のかかり具合や風通しの差などがありますが、植物が生きていくためには肥料よりも土壌が重要なことを実感してもらうために、市販の培養土だけを使うのではなく、花壇の環境に合わせて数種類の土を混合することにしました。

何百袋と積まれた土をそれぞれの花壇に分配し、皆さんの目の前でそれを混合していきながら、植物にとっての良い土の必要性を説明しました。土の大切さを理解しながら作業してもらうことは、とても重要なことだと考えたからです。花壇によっては土壌を深耕し、必要に応じてフルイをかけ石ころなど不要物を取り除かねばなりません。多量の用土を丁寧に混合していく土入れ作業は、とくにはじめての人には、やはり重労働のようです。一度も手が入っていない土壌は手間がかかるものですが、植えた植物の生育に大きく影響するので妥協するわけにはいきません。男性陣からは、「現場監督さんが、怖いムチを持っているから……」と冗談の声さえあがり、たがいに大声で笑って士気を高めあいました。汗を拭いながら、最終的に土が入った花壇

を見たとき、「土だけでも綺麗なものですね」という声上がり、次回の苗の植え込みを待ち遠しく感じてくれたようでした

第4段階：植栽図に合わせて、苗を分配し、それぞれの配置を考えたら、さあ植え込みです。苗の植え込みは皆さんが日常的に行っていることですが、深植え・浅植えによる植物への影響など、「なぜ？」を「なるほど!」に変えてもらいながら、ひとつひとつ作業を積み重ねていくことが、無理のない結果の充実につながっていくようです。やはりいちばん楽しい作業なのでしょう。笑顔がこぼれ優しい雰囲気に包まれながら、作業は進み花壇が完成していきます。



2007花壇の小道完成



2007花壇完成

ここまでは、市や委員会との共同作業でした。発案があり、それを結果へと結びつけるという、目標がはっきりと見えていることでした。これからはじまる花壇管理では、ちょっと性格のちがう問題が出てきます。

第5段階：花壇管理は「ロー・メンテナンス」にすべきと判断し、市の予算がなかったので、ボランティアで管理をはじめました。どの花壇も、そのつど市に報告しながら、仕事の合間を見て手入れにまわりました。

手入れに入る私に市から費用が出ているのだろうと、センターの方ではっきりそう思っていたそうです。じつはボランティアだと分かれると恐縮されて、枯れた苗の補植材料費だけでもお支払いしたいと申し出て下さったのですが、内部では捻出できず市に相談しました。ところが、市の担当部局は「個人の満足で植えているのでしょよう」との見解だったそうです。そうなるとセンター側としても、公共の花壇を私物化するのはまずいと判断せざるをえ

ず、ボランティアであれ手入れするのは止めて欲しいということになってしまいました。

驚いた私は、花壇は綺麗に咲きそろう、市民に喜んでもらってこそ意味があること、そのためには管理の必要があり、自分をはじめに関わったものとして、植え付けただけで終わるのではなく除草や補植をして、開花するまで見守る責任があると考えていること、市から依頼されたわけではないが、市には報告しながらボランティアとして活動していることなどを説明しました。するとセンターから、本当は自分たちもどうすればよいか分からず困っていたので、ぜひ引き続きお願いしますとの返事がきました。

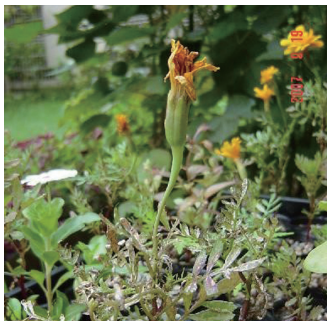
その後も手入れを続け、咲き揃った花壇は2007年市内街並み写真コンテストにも選ばれ、ようやく市民の方たちに喜んでいただくという目的を果たすことができたのでした。



街並みコンテストに選ばれた花壇 2008・4月

花壇は植えてお仕舞いではない ― 花壇管理の大切さ

このような経験を踏まえ、2箇所目の花壇からは、次のこととくに注意しました。①補植は、苗の選択、生育の管理の延長として行うものであることを理解していただくこと、②費用が補助されないので、自家栽培苗や生産者の方から不要な苗などを提供してもらい、負担する費用をなるべく抑えること、そして、市やセンターにボランティアの必要性を理解してもらうことです。



ポット上げたマリーゴールド



狛江市の苗生産者からの提供苗

公園の花壇では、毎月ボランティアの方がいっしょに作業して下さったので、管理がとても綺麗に行き届くようになりました。家族で参加して下さる方の娘さんが描いた作業風景は市の緑化運動の絵画部門で入賞皆でお祝いをしました。



●2008・4月・公園花壇



●公園花壇小学生ボランティア

しかし、他の3箇所の花壇については、私が仕事の合間にまわることになり、一人での作業ではなかなか十分な管理ができず、「雑草が目立つ」とか「落ち葉が汚い」といった声ばかりが聞こえてきました。なかには「いっそ全部引き抜いて、手のかからない植木に変えてしまったほうがよい」との声もありました。

そうしたなか、折角の花壇なのだからとセンター内で声が上がり、花壇管理のための委員会が設置されることになったのです。

人の手というのは素晴らしいもので、花壇は見るみる綺麗になっていき、

翌春には見事に咲き揃いました。委員会の関係者が市長に対して、市民を交えての花壇作りはつくるだけでなく維持管理していくことが大切なのだという私たちの声を届けてくださいました。そのお陰で、維持管理のための予算も計上されるようになったのです。



●2008・3月・作業風景



●2008・4月・花壇風景

その予算にもとづいて、維持管理のために次のことを具体的に進めることになりました。第一が、「花壇ボランティア養成講座」です。そして第二に、市民とともに作り上げた花壇を、市民とセンターの委員会がともに維持管理していくため、年に数回、市と委員会が管理指導をしつつ協働で作業する。

私は他にも、種蒔きや挿し木など繁殖の指導も、ボランティアとしてお手伝いをしていました。

1年目は万事が上手く行ったのですが、2年目は夏に高温が続いたため、初回の播種苗が溶けてしまい、少なからず不評が出ました。その後、何度目かの播種のさいには、指導内容に対して、ちがうやり方をしたいとの意見が出ました。意見が出るのはたがいに成長した証と考え、その意見を取り入れて栽培したところ、把握していた栽培法とは違うのでうまく予測がつかず、問題が生じてしまいました。

私の対応や対処に、一方的に抗議する関係者の言葉を聞きながら、はじめボランティアという後ろ盾のない中途半端な立場を実感しました。

恵泉の卒業生であることに恥じないようにと行動していましたので、いろいろ考えた末、役所に出向いていきました。そして、仕事ではないので時間的には限られるが、植物を育む立場としてできるだけのことはしてきた旨を

説明し、力不足で至らないようなら辞退したいと申し出ました。

迷いのなかで出会った言葉

つねづね、座右の銘として、有償無償に関係なく植物に対して何かできることをしたいと考えてきましたが、正直に告白すれば、ボランティアということに疑問を感じました。市からは、花壇ボランティア養成講座を含むいくつかのお仕事をはじめ、播種指導などの依頼もありましたが、自分が感じた矛盾は消えませんでした。組織としては無償の労働提供は必要でしょうし、大歓迎してくれます。しかし他方では、同じ行為に多額の代価が支出されているのも事実です。

ボランティアは、心があるから労働を提供するのです。この重要な点を理解し評価しあえる人間関係なくしては、ボランティアは成り立ちません。

「労働」と「金銭」と「心」——園芸の場で必要とされることは、私にとってこのうえもなく嬉しいことですが、人と人との関係のなか行う以上、この三つは切り離すことができないし、そのことを踏まえていなければ前には進めません。思案の日々をしばらく過ごしていましたが、やがて足が自然と母校の恵泉に向かっていました。

話を聞いてくれた先輩から、いくつもの大切なご教示をいただきました。ボランティアが無償の行為であることを忘れてはならないこと、その活動に必要なお金は支払いを請求してかまわないこと、そして仕事としての講座の指導については、それで収益を得るというのではなく、その結果に対する評価として謝金をいただくのだと考えるべきだということです。そして最後に、「社会にはさまざまな考えの人がいるのだから、すべてを自分の物差しで測っては駄目ですよ」と示唆して下さいました。

暖かな励ましの言葉とご教示をいただき、ようやく迷いから覚めた私は、もう一度、自分のボランティアとしての活動をつづけるために、また身をもって知ったボランティアと組織の問題を理解し解決するためにも、ボランティア養成講座をお引き受けする決意をかためたのでした。

ボランティア養成講座でもっとも大切なことは、園芸をとおして人の心が育まれることでしょう。その目的にためには、参加者にそのことを理解して

もらうのがいちばんです。しかし現実には、園芸に対する認識の差を考慮したうえで、まずは作業に興味を持ってもらい、「なぜ？」から「なるほど、やってみよう」と行動に進んでいただき、実際のボランティア活動を実践してもらうほかないだろうと思います。

ボランティア活動は、なによりも笑顔ではじまり笑顔で終わって欲しいものです。

行政に対しては、いまの利益追求の社会では労働は有償であり、業者主体の花壇造りには数倍の費用が支出されていることを、十二分に認識していただきたいと思います。労働を無償で提供するには、ボランティアの行為には心がともなっていることを、行政側にはなによりも理解し評価していただき、たがいに協働の精神を発揮しなければならないことを機会あるごとに話していかなければならないでしょう。

私たちボランティアの側としても、つねに作業内容を報告するなど、現状や問題点を行政側に把握し理解してもらう努力を怠ってはならないでしょう。認識においては、雇用ではなく市民としての協同であることを理解してもらい、行動においては、行政と市民ボランティアとの協働作業の場の設置などを通じて、理解を態度で具体的にしめしてもらうことが必要でしょう。

ネアンデルタール人が死者に矢車草などの花を手向けて埋葬したのは、彼らに人としての心があったからだといわれています。花は喜びや悲しみを、そっと伝えてくれます。植物が生き生きと生育していける空間は、人間にも快適な生活環境をあたえてくれるはずです。

地域でのガーデニングや園芸活動、さまざまな場所での緑化活動に、園芸ボランティアが関わることによって、より快適で豊かな社会が創造されていくと信じています。

最後に、忙しい中にもかかわらず、共に花壇管理をして下さっております委員会やボランティアの方々、機会を与えて下さった市役所の方々へ心から感謝申し上げます。



市民ボランティアの皆様



2008・4月花壇風景